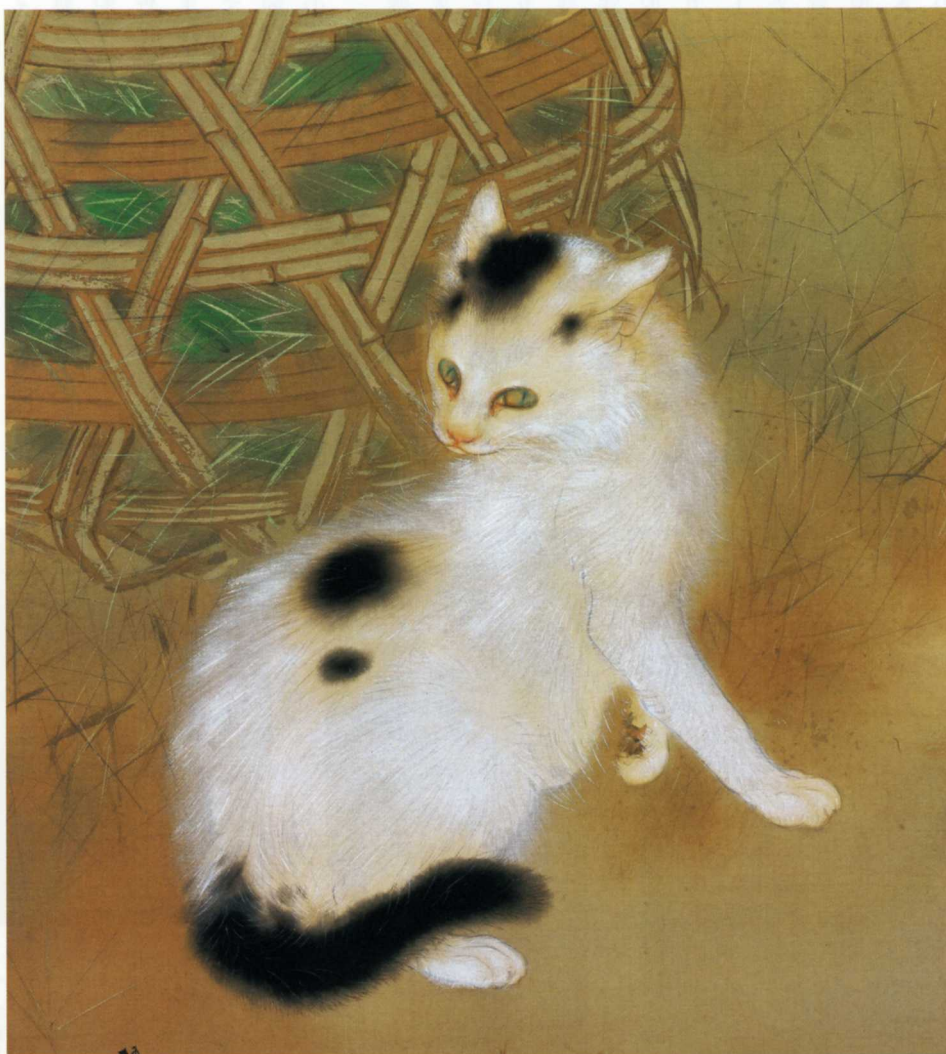


生誕一五〇年記念

竹内栖鳳展



小春部分 一九一七(昭和二年) 海の見える杜美術館



風濤 一九八六(正七年頃) 海の見える杜美術館

2015年7月18日(土) — 8月30日(日)

休館日 毎週月曜日(祝日のときは開館し、その翌日を休館)
 開館時間 午前9時30分—午後5時(入館は午後4時30分まで)
 入館料 一般720(640)円、大学生510(460)円、高校生以下は無料
 ※()内は20名以上の団体割引料金
 主催 公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館 / 日光市 / 日光市教育委員会 / 下野新聞社
 協賛 野崎印刷紙業 企画協力 神戸新聞社

生誕一五〇年記念

竹内栖鳳展

二〇一四（平成二六）年に生誕一五〇年を迎えた、近代日本を代表する京都の画家・竹内栖鳳の多彩な画業を通観する展覧会を、小杉放菴記念日光美術館において開催いたします。

竹内栖鳳は、一八六四（元治元）年に京都で生まれました。時代に即した新しい絵画を模索していた明治初期、若き日の栖鳳は、京都の伝統的な画派である円山四条派だけでなく、数多くの流派の画技を習得し、その変幻自在な表現は、ときに、得体の知れない伝説上の怪物「鵺」に例えられることもありました。

また、新しい日本の絵画を追求した栖鳳の表現は、伝統的な枠組みにおさまるものではなく、一九〇〇（明治三三）年に渡欧し、ヨーロッパの芸術に大きな感化を受けて帰国すると、その技法を巧みに取り入れた近代的な日本画の創出に取り組みます。その意欲の結実した作品が、一九〇三（明治三六）年に描かれた『羅馬之図』でした。幼少からの絶え間ない修練に裏打ちされた圧倒的な筆技を下地とし、新たな表現技法を貪欲に吸収した栖鳳は、伝統と革新の双方を体現した画家といえるでしょう。

本展では、一三三年ぶりの一般公開となる唯一の油彩画『スエズ景色』をはじめ、数々の名品や初公開の作品を展示し、栖鳳の多様な表現の世界を御覧いただくとともに、栖鳳が過去から継承したものは何であったのか、そして、未来へつなげていったものは何であるのかを、改めて探ることができればと考えています。

*所蔵は全て海の見える杜美術館



潮来初夏 一九二九（昭和四）年頃

應挙 栖鳳の暢達顧慮なき線は日本独特の素描だとも思ふことです
栖鳳ほどに筆のきいた人なく 四條派は前の應挙と後の栖鳳だけだと考へる
宗達光琳はお能で 應挙栖鳳はカブキ芝居の如くにも 考へられます 四條派の線はかまはず 側筆を使ふ この点南画北画の直筆正統派から俗画だとなされる側筆必ずしも邪道ではないと思ふけれども
一九五六（昭和三十）年九月二〇日付
小杉放菴の書簡より



【交通案内】
・東武日光駅、JR日光駅から清滝・細尾、中禅寺・湯元、西参道（東照宮）方面行きバス5分。神橋停留所より徒歩3分
・日光宇都宮道路・日光インターから約2km

小杉放菴記念日光美術館



観花 一八九八（明治三二）年



高士観瀑図 一八九三（明治二六）年頃



スエズ景色 一九〇一（明治三四）年



獅子図 一九〇一（明治三四）年

【会期中の催し物】

■ギャラリートーク「技術から見た竹内栖鳳」7月26日（日）11時-12時まで
講師：宮北千織（文星芸術大学教授/日本美術院同人） ※入館料のみで聴講可
院展の同人である宮北千織氏に、日本画の技術的な側面から見た竹内栖鳳の作品の魅力についてお話しいただきます。

■日光出前寄席 陸(6)―上方落語の楽しみ 8月22日（土）18時30分開演（17時30分開場） 出演：桂米二（落語） ※チケット2,000円
京の画家・竹内栖鳳の展覧会に合わせて、京の噺家・桂米二師匠による上方落語を楽しむ会を開催します。